

福井県医師会

だより

第600号 平成23年(2011)6月



旅の思い出—網走原生花園

福井市 丹尾 太

表紙写真説明：旅の思い出—網走原生花園

福井市 丹尾 太

道東、涛沸湖とオホーツク海に挟まれた約8kmの砂丘に、短い夏、約40種類の野生の花々が咲くお花畑です。ハマナス（下）エゾキスゲ（右下）エゾスカシユリ（中央）



副会長就任挨拶

福井県医師会副会長 池端 幸彦

さる4月28日の第224回福井県医師会臨時代議員会において、図らずも福井県医師会副会長に選出頂きましたこと、心より御礼申し上げます。私はこれまで、武生医師会理事（臨床検査センター、介護保険担当）6期12年、県医師会では介護保険委員会委員長を3期6年、理事（介護保険担当）を3期6年と、医師会活動は介護保険畑一筋でしたので、それ以外については文字通り浅学非才かつ若輩者であり、この大役が務まるのかと不安も多いところではありますが、若さとフットワークの良さを前面に出して、大中新会長、奥村新副会長を少しでも補佐し、県医師会並びに県医学会の発展、ひいては県民の保健福祉向上に貢献できるよう全身全霊頑張る決意でございます。

そしてまた、1千年に一度という未曾有の東日本大震災と原発事故で被災された方々と、今でも避難生活を余儀なくされている全ての方々に、改めて心よりお見舞い申し上げます。あの大きな船舶が、まるでおもちゃのようにいとも簡単に陸に打ち上げられた映像を見るにつけ、やはりヒトなんて大きな自然の驚異の前では、まだまだちっぽけなものなのだと思わざるを得ません。人類のめざましい科学の進歩があるとはいえ、決して自然の猛威を全て乗り越えられるわけではないことを、改めて思い知らされました。医療界で言えば、多産多死から少産少死の時代に移り、医学のめざましい進歩により、最近ではまるでヒトの生き死にまで科学（医学）がコントロール出来るようになるのではないかという錯覚にさえ陥ってしまう程でしたが、「命」とは尊いものであるが、それはまたいつかは尽きるものであるからこそ尊いのだということも知らなければならぬのかもしれない。

医療介護分野でよく使われるQOL（Quality of Life）という言葉の中の“Life”には、「生命」「生活」「人生」といった意味があります。そして文

字通り生命（いのち）を守るのが救急救命を含む急性期医療であり、一方「生活」「人生」を支えるための医療が慢性期医療、地域医療という事になるでしょう。国内外から駆けつけた多くの救急医療チームや災害医療チームの活躍のお陰で運良く生命の危機から脱した方々も、生活が出来ない状況の中で必死に頑張り、徐々に眠る場所や食べ物が確保され、お風呂も入れるようになると、次に必要とされる医療ニーズは、血圧の治療や風邪の治療、即ち慢性期医療、地域医療であり、正に急性期から慢性期医療・在宅医療への、シームレスな医療連携が求められます。このあたりにも、「病院対開業医」「入院医療対在宅医療」といった対立の構図ではない、今後のあるべき日本の医療体制へのヒントがあるような気がします。

ご承知の通り、平成24年度は診療報酬・介護報酬同時改定の年であります。一部では大震災と原発事故の影響で改定期期を見直すことも取りざたされておりますが、団塊の世代の高齢化も目前、新たな医療介護提供体制の構築は待ったなしです。一方で、震災後の復興財源は途方もない数字が上げられており、正にこれから先20年間の日本は正念場を迎えます。だからこそ私達は、単に医療介護の財源探しや、看取りは在宅か施設かと言った近視眼的議論ではなく、これから先、我々日本人は一体どのように生命を維持し、生活を支え、人生を歩んでいきたいのか、そしてその為に誰がどこまでの負担なら覚悟できるのかを、県民・国民と共に大いに議論し、その中から我々自身が選択をしていかなければいけないのではないのでしょうか。いずれにしても課題山積の医療界ではありますが、今後とも会員各位の絶大なる御指導御鞭撻を切にお願いし、就任のご挨拶に代えさせていただきます。